

2021年度卒業論文紹介

渡邊 颯翼

宝塚歌劇団における海外公演 ——第一回欧州公演を事例に——

宝塚歌劇団は1914年に、阪急電鉄の創業者で政治家でもあった小林一三によって、誰もが楽しめる国民劇を目指して創設された未婚の女性だけによる歌劇団である。伝統的な歴史を持つ宝塚歌劇団は、現在に至るまで何度か海外公演を行ってきた。本研究で検討する海外公演は、第二次世界大戦前夜の1938年10月から1939年3月に行われた第一回欧州公演である。宝塚歌劇団史上、初めて行われたこの海外公演は、ドイツ・ポーランド・イタリアの26都市で親善公演を行った。危険極まりないこの時期になぜ巡演を行ったのか。また、巨額の資金を投じてまで派遣した小林一三には、どのような思惑があったのかを明らかにすることを試みた。公演に至った経緯から欧州公演の内容、旅程を時系列に沿って取り上げると共に、総監督の秦豊吉や参加した宝塚歌劇団員等の手記から、重く横たわる、軍国主義下の日本における価値観についても取り上げた。

宝塚歌劇に関する図書・資料を数多く蔵書する大阪府池田市にある池田文庫で研究資料を集めた。結果、第一回欧州公演は歴史、社会、政治、文化史など様々な面が関わって行われていたことが分かった。小林一三には、歌劇団の海外公演において、日本文化を伝える文化交流だけでなく、創設から独自の発展を遂げた宝塚歌劇団が演劇の本場でどのような受け取り方をされるかを探るという意図もあったことが分かった。日独伊防共協定、満州国承認を記念した公演という、極めて政治的な意味合いも強かったということも見逃せない。帝国ポグロムの夜を間近で体験しても、一切事情の分からなかった歌劇団員達。ナチスやファシス

ト党を讃える歌を歌い、ヒトラーユーゲントやムッソリーニに陶醉していた手記から、ファシズムの画一的な価値観で形成された社会に生きる一般市民のある種の怖さや危うさ、軍国主義の時代の文化交流の側面が明らかになった。

松本 大希

近世以降における話法の助動詞 *mögen* と *möchte* の意味的發展について——『角質のジークフリート』と『ヴェルヘルムマイスターの遍歴時代』を資料として——

現代ドイツ語における話法の助動詞には多くの語形と用法が見られ、文語や日常会話において、話法の助動詞は欠かすことのできない重要な品詞と言えよう。その中には、過去から現在に至るまで、*können* のようにそれほど意味が変わることなく用いられ続けているものもあれば、他方で時代を経るにつれて大きく意味が移り変わっていったものもある。本論では、話法の助動詞の中でも大きな用法の変遷が見られる *mögen* と *möchte* の用法に着目した。そしてそれらについて、近世以降の2つの文学作品『*Historie von dem gehörnten Siegfried*』『*Wilhelm Meisters Wanderjahre*』を資料として分析と比較をした。

本論では話法の助動詞についての先行研究について述べたあと、それぞれの作品における *mögen* と *möchte* の用法について分析を行う。

まず、現代ドイツ語の *mögen* と *möchte* の意味について、在間『アクセス独和辞典』(2017)には、話法の助動詞 *mögen* には1番目に「…かもしれない」、2番目に接続法第2式 *möchte* の形で「…したい」、3番目には疑問文や否定文を用いた「…したい」という用法が確認できた。4番目には要求を表す「…してもらいたい」、5番目に許可を意味する「…してもかまわない」など、*mögen* には多くの意味があることが分かる。

また、接続法第2式の *möchte* はその原形の *mögen* とは別に、独立して記載されている。その意味は掲載順に、「…したい」、「…かもしれない」である。

Duden (2016)においても、その用法は主語の意志として主語の願望

を表す「願望」、主語以外の意志を表す「要求」、認識的な用法として主に文章語で用いられる「認容」である。

以上が現代ドイツ語における *mögen* および *möchte* の用法であると言える。しかしながら、時代を遡って *mögen* と *möchte* の意味を調べると、それらは現代ドイツ語とは違う用法でも用いられている。その用法は「…できる」を意味する「可能」である。本論で後に分析を試みる『角質のジークフリート』と『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』においても、この「…できる」の用法が使われている。

次に、これらの作品が書かれた時代の *mögen* について、著名な文法家たちによる当時の辞書をここで調査した。まず *Adelung* (1798) では意味のはじめに「*können*」と書かれている。*Sanders* (1909) では「*wollen und können*」と表記されている。また *Grimm* (1885) でも *mögen* の一番目の用法に「*können*」と記載されている。以上の3つの辞書から、*mögen* にはかつて、*können* と同じ「…できる」の用法を持っていたことがわかる。

また、高橋輝和はその著書『ドイツ語の様相助動詞』で、*mögen* の用法について「かつて庇を貸していた *können* に母屋を奪われる形」と述べており、「…したい」を意味する *mögen* は「『…することができる』からの発展である」と主張している。

以上の資料と文献による先行研究から、かつての *mögen* には可能を表す「…できる」の意味が実際に存在したことは明らかである。

しかしながら、上記の先行研究で明らかになったことは、*mögen* の「…できる」という用法の存在と、その用法が存在した大まかな時期、そして現代ドイツ語にその用法が存在しないという事実だけである。2章からは出版年が異なる二つの資料における *mögen* の用法の違いについて分析することで本論の目的である近世以降における *mögen* の用法の変遷について調べたい。

『角質のジークフリート』(*Historie von dem gehörnten Siegfried*) は民衆本の一つで、作者は不詳である。新高ドイツ語の時代である1728年にライプツィヒで、現存する最古の印刷本が出版された。しかしながらテキストの語法や文体を考慮すると、これは初期新高ドイツ語の時代の作品であると考えられる。

まず『角質のジークフリート』における mögen と möchte の用法について分析をする。分析方法については、*Historie von dem gehörnten Siegfried* (1982) 内で使用されている mögen と möchte の数と用法を調べた。また mögen 全体の分析だけでなく、直説法、接続法Ⅰ式、そして接続法Ⅱ式の möchte など細かく分類して分析をした。今回はページの都合上、mögen 全体の結果のみを書きたい。

mögen 全体	できる	かもし れない	したい	要求	認容	計
個数	25	8	5	1	1	40
割合	62.5%	20.0%	12.5%	2.5%	2.5%	100.0%

本文で 40 個の mögen の使用例を確認できた。そして本論の主たる論点である、可能を意味する「…できる」の用法を確認した。

mögen においても、möchte においても、初期新高ドイツ語の時代のそれらの用法は、現代ドイツ語とは違うということがこの分析を通じて明らかとなった。

次に『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』は、1821 年に『遍歴時代』第一部として出版され、後の 1829 年に完成版が出版された。

また、この作品はゲーテ時代のもので、新高ドイツ語期前半の時代である。またゲーテについて柴 (2021) は「今日の標準ドイツ語の礎を作った」と評している (関西大学独逸文学会、第 113 回研究発表会)。

『角質のジークフリート』と同じように、『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』における mögen 全体の分析結果を以下に示す。

Mögen	かもし れない	できる	したい	要求	その他	不明	計
割合	44.0%	5.8%	30.1%	5.0%	7.7%	7.3%	100%
個数	114	15	78	13	20	19	259

259 個の使用例を確認できた。用法については、『角質のジークフリート』が書かれたと思われる初期新高ドイツ語の時代と比較すると、可能

を表す「…できる」の用法が明らかに衰退していることが判明した。逆に『角質のジークフリート』では数が少ない「…したい」の用法はゲーテ時代のドイツ語の時期にその数を増やしている。

『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』は今日の標準ドイツ語の礎ができた時期の作品ということもあり、現代ドイツ語の *mögen* と *möchte* の用法に近づいているように思われた。

全体のまとめとしては『角質のジークフリート』では現代とは異なる *mögen* と *möchte* の用法が見られ、まだ「…できる」の用法で *mögen*、*möchte* と *können* が共存していたことが明らかとなった。「…したい」などの願望や要求の用法は、この時代には現代ドイツ語ほど多くないこと分かった。

初期新高ドイツ語からゲーテ時代のドイツ語にかけては *mögen* と *möchte* の用法の変遷が少しずつではあるが見られた。分析結果からは可能を表す「…できる」が減少していったことが判明した。一方で願望や要求など「…したい」の用法は初期新高ドイツ語の時期よりも増加していったことも分析を通じて明らかとなった。

また、ゲーテ時代のドイツ語から現代ドイツ語への変遷も調べることができた。ゲーテ時代から急激に「…できる」の用法の数が減少し、現代ドイツ語の用法に一気に近づいたことは一目瞭然である。「母屋」を *können* に奪われた時期はまさにこのゲーテ時代からであると言えよう。

本論の主たる目的は、中世後期から近代にかけての文学を調べることによって *mögen* と *möchte* の用法の変遷を辿り、各時代の用法を比較することで、どのように現代ドイツ語につながっていくのかを考察することであった。研究対象の資料が少なく、対象となった *mögen* と *möchte* の母数もそれぞれの資料で違ったものの、分析の結果を見れば本論の目的は達成されたとと言えるだろう。

2022 年度卒業論文題目一覧

- | | |
|--------|---|
| 名部 榛佳 | ドイツ式敬礼から考察する集団意識 |
| 原 あゆな | ドイツ語とオランダ語の比較研究
—Der Kleine Prinz と De Kleine Prins— |
| 横山 友香 | 『トニオ・クレガー』における翻訳問題
—3つの視点による考察— |
| 河野瞳グレン | ドイツの絵本を用いた対象年齢別の言語分析 |